



9 乱世・泰平の日記

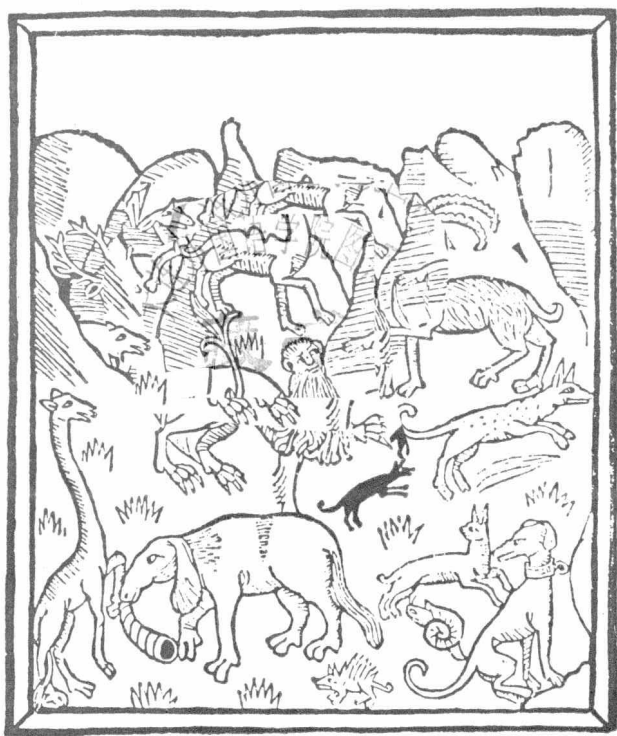
A 乱世の日記

B 泰平の日記

C 附録

筑摩書房

渡辺一夫著作集 9



筑摩書房

渡辺一夫著作集 9 乱世・泰平の日記

一九七一年六月三十日 初版第一刷発行
一九七七年八月十日 増補版第一刷発行

著者 渡辺一夫

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八

電話 東京二九一七六五一

郵便番号 一〇一―九一

振替 東京六一四二二三

印刷 株式会社精興社

製本 和田製本工業株式会社

©渡辺芳枝一九七七

(分類)1398(製品)74809(出版社)4604

乱世・泰平の日記 目次

端書	3
----	---

A 乱世の日記（一九五七年—一九五八年）

小序（一九五八年）	9
序章 十五世紀という乱世	13
第一章 錦の御旗を、と	37
第二章 ブウルゴーニュ的フランス人とアルマニャック的フランス人	78
第三章 白い眼で見られるジャンヌ・ダルク	102

B 泰平の日記（一九五七年—一九六〇年）

小序（一九六〇年）	143
序章	149
ヴァロワ王家・ブルボン王家・ロレーヌ（ギューイズ）家 略系譜	別 刷

第一章	父祖の遺産としての「イタリヤ戦争」——若い国王とマリニャーノの勝利——政教条約——宗教改革思潮の発生……………	157
第二章	シャルル・ド・ブウルボン大元帥の反逆——ルッイ・ド・ベルカン事件——バヴィヤの敗戦——国王捕虜となる……………	215
第三章	フランソワ一世のマドリッド軟禁——国内の治安問題——マドリッド平和条約——フランソワ一世の釈放——シャルル・ド・ブウルボン大元帥の戦死と「ローマ掠奪」……………	278
第四章	フランソワ一世の雌伏——ルッイ・ド・ベルカンの刑死——「貴婦人和議条約」……………	313
第五章	「檄文事件」から「イタリヤ戦争」再開まで……………	356
第六章	（補遺）「三人のアングレムの戦」……………	386

C 附録（一九六八年——一九七〇年）

一	ルッイ・ド・ベルカン事件と二つの『日記』……………	409
二	モンテーニュの『家事日記』から（モンテーニュ投獄事件をめぐって）……………	439
三	アンボワーズ城とブロワ城……………	460

索引		卷末
		I

図版	十五世紀のパリ		39
----	---------	-------	----

	一四二九年におけるフランス王国		79
--	-----------------	-------	----

	一五五九年におけるフランス王国		357
--	-----------------	-------	-----

	一六一〇年におけるフランス王国		387
--	-----------------	-------	-----

「著作集」後記		卷末
		I

乱世・泰平の日記

端 書

本巻『乱世・泰平の日記』には、一九五八年（昭和三十三年）に講談社から上梓された旧著『乱世の日記』と、一九六〇年（昭和三十五年）に白水社から出版された旧著『泰平の日記』と、比較的近年書き綴った三つの雑文とを収めた。前二著は、それぞれA・Bと記号をつけて区分したし、更に三つの雑文を、C「附録」という題名のもとに集めた。なお、目次中A・B・Cの各章名の下に括弧に収めた年代が添えてあるが、各々の文章の執筆時を示すものであって、記述内容とは関係がない。

AもBも、本文中で説明してある通り、いくつかの古文獻の簡単な紹介であり、十五・六世紀のことに関心を持たれる方々の興味を惹くことがあり、更に学問的な考証検討をなさるための踏台ともなればと思つて、求められるがままに筆を弄んだものにすぎない。本文を読まれば判つていただけるかと思うが、決して堂々とした学問的論述ではなく、なるべく多くの人々に、できれば面白可笑しく読んでいただけることを目的としたにすぎない。しかし、「面白可笑しい」文章を綴れたところか、平凡以下の雑文にすぎない結果に終つてしまったようである。素材となつた古記録それ自体は、貴重な文獻であるから、本来ならば、学術雑誌に、しかるべき方々が、立派に紹介して下さればそれに越したことはなかつたのであり、普通の文芸雑誌（『群像』）や綜合雑誌（『心』）に、私が拙い紹介などすべきではなかつたのかもしれない。

Aの場合は、ある古い『日記』の紹介が主眼ではあったが、「救国の女傑」と讃えられているジャンヌ・ダルクが、当時のすべてのフランス人からは、必ずしも手放しで讃えられてはいなかったらしいことが、その古い『日記』から読み取れたように思ったので、決して安易な偶像破壊的な意図からではなく、歴史的人物の評価がいかに複雑困難であるかという点を、読者とともに考え直したいという考えがあったのである。

Bの場合は、ルネサンス期の名君と呼ばれているフランソワ一世の治下は、一見泰平のように見えながらも、**A**の場合とは別な古い『日記』によると、この所謂泰平の世にも、それまで見られなかったような風波が立ち始め、次の乱世の序曲を奏でている面もあったように思われたので、それを紹介しようと考えたにすぎない。

Cにまとめた三つの雑文のうち、ルウィ・ド・ベルカンに関するものは、**B**で紹介した古い『日記』中の一部分を、その後読んだ僅かばかりの資料で補ったものにすぎないし、モンテーニュに関するものは、同じく**B**の「補遺」中で紹介した『日記』の一節を、モンテーニュの残した『家事日記』^{リヴル・ド・レゼン}の記述によって、やや詳細にしたものにすぎない。すべて学術的には、体裁をなして居らぬものであろう。最後の「アンボワーズ城とブロワ城」は、一九六八年に滞仏中依頼された雑文であり、本来『偶感集』にでも収めるべきものかもしれないが、本巻**B**の内容と若干つながりもあると思ったので、敢て**C**中に再録した。

Aの『乱世の日記』（一九五八年）が上梓されてから六年後（昭和三十九年）、当時東京大学を卒業されたばかりの新進西洋史学者で、現在は、茨城大学助教授になられ、つい先頃（昭和四十二年）には、ヨーハン・ホイジンガ（『ホイジンハ』）の『中世の秋』を見事に新訳された堀越孝一氏から、旧稿（『群像』昭和三十二年一月号―十二月号に連載）に対して、最初は私信の形で、次には、『史学会雑誌』に、更に、一九六四年（昭和三十九年）十二月刊の雑誌『象』第八号誌上で、「中世ナチュラリズムの問題」という題名のもとで、厳峻な御批評を受けた。

堀越氏は、「渡辺教授（『私』）の『日記解題』には、前述した一住民（『『日記』の筆者）の記述態度について

の確かな認識に欠けるところが多分に認められると思う。そして、それが〈解題〉の形をとり、しかも、『日記』を我が国においてほとんどはじめて紹介するものであるだけに、『日記』についての誤った先入見を植えつけるものとなるのではないかと惧れる。それ故、僭越とは思いつながらも、若干の批判めいた言葉を弄させていただきたいと思う」（『象』第二八頁）と記して、詳細に、拙稿を批判して下さった。

堀越氏は、「僭越ながら」と記されているが、少しも僭越ではない。西洋中世史・専門家からの批評は、あの古い『日記』を粗雑な文章で紹介した私に期待以上の光栄を与えたことになるから、むしろ感激したいと思う。堀越氏の御批評によって、私の紹介文も、世人に「誤った先入見を植えつけ」ないですむ機縁を与えられたからである。今日まで、堀越孝一助教授にお返事する暇も機会もなかったが、たまたま本巻に旧稿を収録するに当り、同助教授の御批評（『象』所載）を十分に再読し、私の「弁解」を、「註記」の形で本文中に添えることにした。それは正しく「弁解」であって「反駁」などというものではないのである。中世史の専門家の堀越助教授と、大まかにある古文獻の存在を紹介しようとした雑文家の私とは、目標の置き方が全然違っていたからである。私は、同助教授から厳密な学問の世界を教えられたとしても、非難された点に関しては、「それはこういうわけで、そう書いたのだ」と「弁解」するより外にいたし方なかったのである。

読者の方々から見れば、かなりの量の「註記」がお眼触りになるかもしれないが、私の幼稚な文章の内容の背後には、大変困難な問題があるということを、私がそこに引用して置いた堀越助教授の「詰問」「質疑」のなかから汲み取って下さるようお願いする。もし幸い、そういう読み方をして下さる方がいたら、私の拙い紹介文も、「誤った先入見を植えつける」度合いを減じ、やや存在意義を与えられることになるかもしれない。

堀越氏の御批評は、主として本文の後半部、ジャンヌ・ダルクに関する部分についてなされたのであるが、それ以外の部分についても、私を戒告なさりたい点が多々あるに違いないと思う。私自身、文中に、「この点は西洋中

世史の研究家にお訊ねしてみなければならぬ」というようなことを何度か書いたのであるからなお更のことである。

AのみならずB中において取扱った古文獻の読み方にしても、史学専攻の方々から見れば、勝手極まるものであろう。いづれ誰方から十分に是正されねばなるまい。私としては、『シャルル六世・シャルル七世治下におけるパリ一市民の日記』や『フランソワ一世治下におけるパリ一市民の日記』や『フランソワの日記』や『ヴェルソリスの家事日記』や『モンテーニュの家事日記』などの古文獻があり、それが歴史研究にも文学研究にも貴重な資料であるので、それらを紹介することだけを目的としていた。専門の学者を「大名」とすれば、私は、その大名行列の先驅の奴役をつとめるだけのつもりである。この奴の触れまわることが当を逸していたら、「大名」に訂正していただくのが当然である。

なお、B『泰平の日記』の内容となる事項と、その背景となつてゐる時代とのつながりについては、本「著作集」『ルネサンス雑考』下巻に添えた「略年表」を参照していただき、本巻全体の「挿絵」としては、『ルネサンス雑考』上巻の巻頭及び巻末に掲げた昔のバリの地図二葉を眺めていただけたらありがたいと思つてゐる。

本巻上梓に際しては、校正の折、立教大学助教授新倉俊一氏、東京大学助教授西本晃二氏に多大の御迷惑をおかけした上に、有益な御教示も受けたし、東京大学助教授二宮敬氏からは、これまでのように様々な御教示をいただいた。また再三再四のことながら、索引作製という面倒な仕事は、蘆野徳子嬢の犠牲的な御厚志によってまとめられた。いづれの方々への御親切も、「野老曝背」の身には、全くもったいないものであった。

一九七〇年十二月

渡辺 一夫 識

A

乱世の日記（一九五七年―一九五八年）

小序（一九五八年）

本書は、一九五七年一月から十二月にかけて、雑誌『群像』に『二つの古い日記』と題して連載した雑文をまとめ、これを訂正補加したものです。『二つの古い日記』とした理由は、本書の内容となる『シャルル六世・シャルル七世治下におけるパリ一市民の日記』を先ず紹介した後に、同じく筆者不明の『フランソワ一世治下におけるパリ一市民の日記』を解説し、フランス文学及び歴史研究の上で貴重な資料と思われるこの二種類の『日記』の存在を紹介しようと思ったからなのです。その傍、十五世紀から十六世紀にかけて、即ち中世末期からルネサンスへかけてのフランスの文化や国情を私は私なりに描いてみて、専門の学者に教示訂正していただけたらばと思っています。ところが、不馴れなためか叙述が案外長引き、規定の回数内に、この二種の『日記』の解説を収めることは不可能になり、題を裏切り『一つの古い日記』になってしまったのです。甚だ不様なことでした。本書の題は、『乱世の日記』といたしました。

右雑文を掲載している間、様々な方々から御好意に充ちた御注意をいただき、うれしく感じましたが、『講義録めいて』いていけないという御批評もいただきました。甚だもつとですが、本雑文の性質として、また私の能力範囲では、『講義録』的にならざるを得なかったと思っています。

『日記』中からの引用文（片仮名）は、甚だ稚拙ですが、原文は、更に読みにくいし、更に下手だと、私は思っ

います。私としては、故意に稚拙にしたところもあるとすら申したいのです。

このような書物に果して市場価値があるかどうか全く私は知りませんが、一年間毎月書いていた雑文が一巻にまとめられる機縁に恵まれたことはうれしいし、ありがたいと思います。

最後に、過去一年の間、原稿を取りに、また校正を届けに、文字通り、春夏秋冬、毎月、拙宅へ来られた『群像』の中島和夫氏に対して感謝の意を表さねばなりません。同氏の御支持がなかったら、本書の内容となる雑文も綴り了せなかったに違いありません。また、本書が成るに際し、出版部の竹内芳郎氏に色々な御面倒をおかけしたこともありがたく思っています。

なお、本書で取扱った『シャルル六世・シャルル七世治下におけるパリ一市民の日記』と対をなす『フランソワ一世治下におけるパリ一市民の日記』の紹介は、諸先生の御厚志により、雑誌『心』に目下連載させていただいています。

一九五八年三月

(附記) この「小序」は、一九五八年に本書が上梓された時に添えた「後記」である。(déc. 1970)

序章	十五世紀という乱世	13
第一章	錦の御旗を、と	37
第二章	ブルゴーニュ的フランス人とアルマニャック的フランス人	78
第三章	白い眼で見られるジャンヌ・ダルク	102